

OVA という「発明」

——「テレビ的なもの」の位置づけをめぐる——

明星大学 永田大輔

1 目的

本報告では、アニメ産業において 1980 年代中盤に登場し、急速に存在感を増していったパッケージソフトである OVA（オリジナル・ビデオ・アニメーション）に関する言説に着目する。その中でもそれがその他のメディアとどのような対比関係の下で語られていたかに着目する。その際にビデオ自体の普及史やアニメ産業の状況に関して論じる。

2 方法

本報告では OVA に関してアニメ雑誌を資料として分析する。その中でも消費者（読者）・制作者双方の視点や両者の関係を踏まえて分析を行うこととする。中でも当時の産業史的な条件やメディアの普及状況なども読解の資源として参照し分析を行う。

3 結果

テレビアニメの登場をアニメの展開の画期であるとする言説が多い。それはこれまで映画が中心であったアニメの作られ方や市場構造を決定的に変えたものとして議論するものである。しかし、それに匹敵する規模でアニメ産業の構造を変えたはずである OVA などのパッケージソフトの登場について議論するものはすくない。数少ない先行する議論は東浩紀の OVA に関する議論である。そこでは「テレビアニメ」が子供向け・一般向けアニメを代表するもの・「OVA」がオタク的なアニメを代表とするものだとされている。だが、いかにしてこうした区分が成立したのかという歴史的な視点が存在しない。

このような議論の意義は「テレビアニメ」とそれ以前の劇場版アニメという対比のもとでなされたことの意義を考えると明らかになる。テレビアニメについて議論がなされることの最大の貢献はテレビアニメ以前の劇場版アニメがどのようなものであったかに着目がなされたことであった。そうした対比の下に OVA が議論されることでテレビアニメの構造も輪郭を結びやすくなる。

4 結論

テレビアニメとの対比において OVA はまず「自由な表現」がめざされていた。だが、同時に OVA のような「自由な表現」は「一般的な表現」を遠ざけるものとしても語られていた。こうした論争の構図の前提としてアニメ産業の制作人口が限られていたという産業的な制約が存在したのである。そのことを前提に個別の言説を読み解くこととし、それを現在のアニメ産業とも関連づける。

このように対比の下でアニメを語るという視座は OVA に限らず広くアニメを語る上で有効な視座となりうる。

東浩紀 1996 「庵野秀明はいかにして八〇年代アニメを終わらせたか」(『ユリイカ』28(9): 112—123)